

入院患者の看護師に対する意識調査

1病棟6階 ○本田 一雄 村田 三代子 藤村 雅子
佐藤 恵美子 高木 啓子

I.はじめに

看護師は、今までに精神科領域や手術室・透析室といった限られた場所で勤務してきた。しかし、最近では小児科・内科・外科病棟などに勤務する看護師の数は増えてきている。1995年病院看護基礎調査¹⁾によると、全国での看護師の配属部署別の構成比は、[精神科病棟] 48.9%、[その他病棟] 24.8%、[手術室] 12.6%となっている。看護要員のうち看護師(准看護師含む)の構成割合は3.4%、特定機能病院の88.2%は男性看護要員を配置している。当病院においても数年前より一般病棟への看護師の配置がされるようになった。

これまでに牧野ら^{2) 3)}は看護管理者と看護婦からみた看護師に対する意識調査を行い看護師が一般病棟へ進出することに期待していると報告している。しかし看護師が女性の患者に羞恥心を伴うケアを行う場合に拒否されることがあり業務に支障をきたすことがある。そこで患者からみた看護師の意識調査を報告した例が少ないため、患者が看護師にどのようなイメージを抱き、その期待される役割は何かを知るためにアンケート調査を行い比較検討したので報告する。

II.研究方法

1.対象

当病院に入院中の15歳以上の患者265人(小児科・集中治療センター・産婦人科・精神科病棟を除く)

2.調査期間

1998年7月から8月

3.方法

無記名による多肢選択と自由記述による独自に作成した質問紙を各病棟に配布し、対象者本人から、および看護者を通して回収した。そしてそれぞれの項目について分析・考察した。

4.調査内容

- 1) 看護師を知っていたか
- 2) 看護師を必要と思っているのか
- 3) 看護師にケアを受けたことのない患者の看護師へのイメージ
- 4) 看護師にケアを受けたことのある患者の看護師に対する印象
- 5) 看護婦/看護師それぞれに期待する役割

III.結果・考察

回収率は76.6%で、有効回答率は91.8%であった。年齢の内訳は図-1の通りであった。アンケート調査の結果、“看護師を知っていた”と答えた患者は全体の84.5%で、“少し知っていた”と答えた患者を含めると95.8%と高かった(図-2)。これは、近年看護師・准看護師の数が徐々に増加してきていることとともに、当病院でも一般病棟へ看護師が勤務するようになってきたと考える。また、看護師・保健士の報道や助産士の問題がマスコミなどで取

り上げられ、一般に知られる機会が多くなってきたことなども一因と考える。一方、看護師を知らなかったと答えた患者は4.2%であった。この中には看護師の勤務している病棟へ入院経験があるにもかかわらず、看護師を知らなかったと答えた患者が1.9%であった。これは看護師が外見上医師や理学療法士など他の職種と区別がつきにくく、患者側へ看護者が名乗らないと認知してもらえないためと考える。

看護師を必要と思っている患者は回答者の75.9%で、実際に看護師の勤務している病棟へ入院経験のある患者では、入院経験のない患者より高い数値が得られた(図-3.4)。また、“わからない”“どちらともいえない”と答えた患者はそれぞれ13.8%・8.9%であり、“必要ない”と答えた患者は1人だけであった。

看護師からケアを受けていない患者の看護師に対するイメージは(図-5)、“わからない”が多かった。その他では“頼れる”という回答が多く、次に“声をかけにくい”“優しい”の順で“怖い”“威圧的”と答えた患者はいなかった。安岡ら⁴⁾によると看護婦からみた一般男性と看護師のイメージを調査した報告では、看護職につく男性のイメージは“体格が良い”“頼りになる”という一般男性のイメージに加え“人の世話をする”“優しい”という肯定的なポイントが高く、反対に一般男性よりも“怖い”“威圧的”と言うポイントが低かったと報告している。このことから、患者が看護師に抱くイメージは看護婦と同様であったと考える。20世紀前半頃まで精神科病棟において看護師が患者を威圧し制していたという“暴力的”なイメージの背景とは異なり、よいイメージを持つ患者が多かった。

実際に看護師からケアを受けたことのある患者の看護師に対するはじめの印象は、“良かった”と答えた患者が62.0%と多かった。“悪かった”と答えた患者は男性1人で“どちらでもない”“わからない”がそれぞれ16.9%・11.3%であった(図-6)。

ケアを受けた後で“印象がよくなった”と答えた患者は、はじめの印象から良かったと言う患者を含めて52.1%であった。その理由として多い順に“親しみやすかった”“安心感が得られた”“親身であった”“頼りがいがあった”“指導が良かった”“気遣ってもらった”と回答が得られた(図-8)。また、ケアを受けた後で“印象が悪くなった”と答えた患者は3人で、その根拠として“親しみ”をあげているが、ここでも“怖い”“威圧的”という印象はなかった。

次に看護師よりケアを受けたことのある患者に、それぞれのケアについて看護婦・看護師のどちらにケアされたいと思っているのかを質問した。結果は以下の通りである。

検温・検査や手術の説明・ガーゼ交換・服薬・注射などの処置については、男女間で看護婦、看護師で偏った傾向はみられなかった。話を聞くなどの精神的なケアにおいてはどちらでも良いと答えた患者が多かった。看護婦と看護師で比べると男性患者では看護師が良いと答えている患者が多かった。この理由として同じ男性の立場からより近い視点で患者に接することができるためと考える。体を抱えるなどの物理的な力を必要とするケアでは、看護師を望む意見が男女を問わず多く、患者が看護師へ抱くイメージは一般男性のイメージ“体格が良い”“頼れる”といったことと重なっていると考え。洗髪・更衣・食事介助など身の回りのケアにおいては、男女を問わず看護婦を希望する患者が多かった。これは、「介護は女性が行うこと」といった考えが根強く残っていることや、看護職が絶対多数である女性の職場であることで、受ける側の患者が自然と看護婦を希望しているのではないかと考える。

排泄ケア・坐薬・浣腸・清拭・入浴介助などの羞恥心を伴うケアにおいて“看護婦・看護師のどちらでもかまわない”という女性患者が、看護婦を希望すると答えた女性患者と同数であった。“看護師を希望する”と答えた女性患者はほとんどいなかった。羞恥心を伴うケアの場面においては、女性患者は看護師を嫌悪するであろうという予測に反し、看護師が女性患者にも受け入れられつつあるあらわれではないかと考える。男性患者においてこれらのケアに対して“看護婦を希望する”という回答が“看護師を希望する”という回答より上回っていた。これは「下の世話は女性がすること」と思っている男性患者が多かったためと考える。

看護師にケアを受けたことのない患者に“看護婦・看護師のどちらにケアをされたいか”という質問をしたところ、“看護婦”と答えた患者は男性39.7%、女性54.9%であった。“どちらでも良い”と答えた患者は男性30.8%女性21.6%で看護師と答えた患者は男女共に1人ずつであった。“処置による”と答えた患者は、男性19.2%・女性15.7%であった(図9.10.11)。“看護師にして欲しくないケア”を聞いたところ女性患者の多くが“羞恥心を伴うケア”をあげていた。男性患者にも「同性には下の世話は絶対に嫌」といった意見も見られた。反対に看護師にして欲しいケアは男女を問わず“物理的な力を必要とするケア”とほとんどの患者が答えていた。他に「下の世話は看護師にして欲しい」という男性患者の意見や「同性にしかわからないこともあるので男性患者にも看護師が必要なときもあるのではないか」という女性患者の意見もあった。

これらの結果から当病院においては看護師の知名度は高く、看護師を必要と思っている患者は多かった。しかし、その期待する役割は物理的な力を必要とするケアに偏っていた。羞恥心を伴うケアにおいて、まだ受ける側の患者が看護師の行う事に躊躇していると考えられる。医師が専門職として性別を越えているのに対して、看護師が専門職として性別を越えられないのは、先の「介護は女性がすること」という考えや、受ける側の患者が看護職としての看護師を認識していないことも一因として考える。

IV.まとめ

今回入院患者の看護師に対する意識調査を質問紙を用いて行い、以下のような結果を得ることができた。

- 1.看護師に対するイメージは、“頼りになる”“安心感がある”など肯定的なイメージで、“怖い”“威圧的”という否定的なイメージはなかった。
- 2.看護師を知っている患者は多く、また看護師を必要と思っている患者は多かった。
- 3.羞恥心を伴うケアに関して、実際にケアを受けたことのない患者は躊躇しているが、ケアを受けたことのある患者では看護師のケアを受け入れつつあると考える。
- 4.看護師に期待している役割は、物理的な力を必要とするケアという意見が多かった。
- 5.看護師からケアを受けたことのある患者では、ケアを受けていない患者よりも看護師の受け入れが良くなっている。

V.おわりに

一般病棟で勤務する看護師は少ないが、男性も女性もいる患者のニードにあった看護を提供していくためには、今後看護師の存在も重要なものとなってくる。看護師が一般病棟へ進出していくためには、一般社会や医療関係者へ看護師への理解と協力を求めると共に、看護

士自身が専門職としての存在をアピールすることも重要である。

【引用文献】

- 1) 日本看護協会調査研究報告No50『1995年病院看護基礎調査』
- 2) 牧野 尚子ほか：看護における男性の進出に関する研究 (3) 看護婦の受け入れ体制について、日本看護研究学会雑誌、Vol.19,No.4,P94,1996.
- 3) 牧野 尚子ほか：看護における男性の進出に関する研究 (4) 総婦長からみた看護師の受け入れについて、日本看護研究学会雑誌、Vol.20,No2,P57~58,1997.
- 4) 安岡 満利子ほか：看護における男性の進出に関する研究 (1) 男性と看護師のイメージについて、日本看護研究学会雑誌、Vol.19.No4.P92~93.1996.

【参考文献】

- 1) 北池 正ほか：看護師における男性の進出に関する研究 (1) 男性と看護師のイメージについて、日本看護研究学会雑誌、Vol.19,No4,P92,1996.
- 2) 原田 真澄ほか：看護師における男性の進出に関する研究 (2) 看護業務の適正について、日本看護研究学会雑誌、Vol.19,No4,P93,1996.
- 3) 伊藤 景一ほか：一般病棟の看護師、看護学雑誌、Vol.56,No7,P593~618,1992.
- 4) 矢野 真二ほか：特集 看護師の役割を考える、Vol42,No2,1978.
- 5) 比嘉 政実ほか：看護師が生きる職場に 看護の専門性を問う、看護、Vol42,No.5,P33~37, 1990.
- 6) 辻本 好子：患者が看護師に期待するもの、月刊ナーシング、Vol13,No3,P68~71,1993.
- 7) 百田 武司、鈴木 正子：看護師のかかえる問題、看護学雑誌Vol62,No3,P280~283,1998.

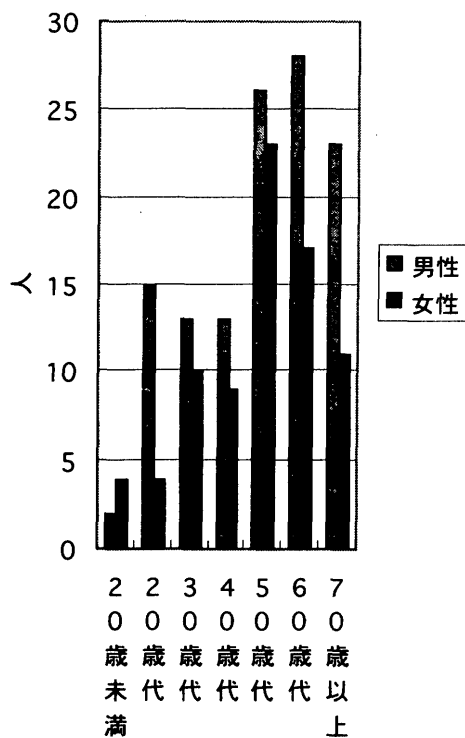


図-1 年齢構成

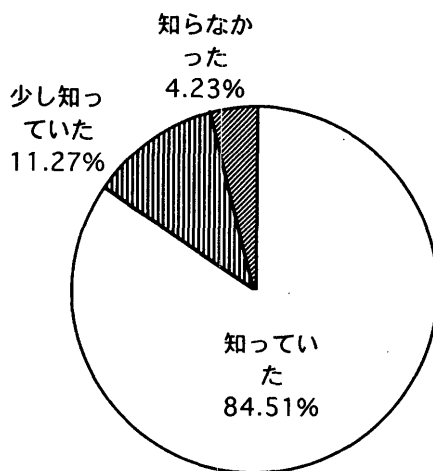


図-2 看護師を知っていたか

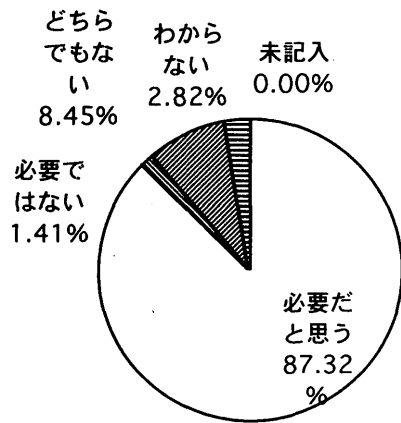


図-3 看護師は必要か（入院あり）

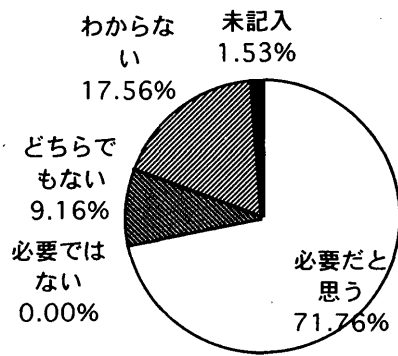


図-4 看護師は必要か（入院なし）

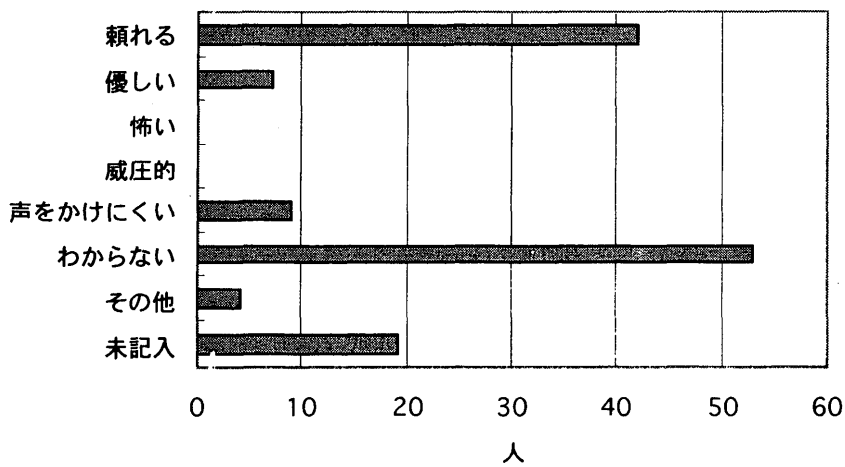


図-5 看護師のイメージ

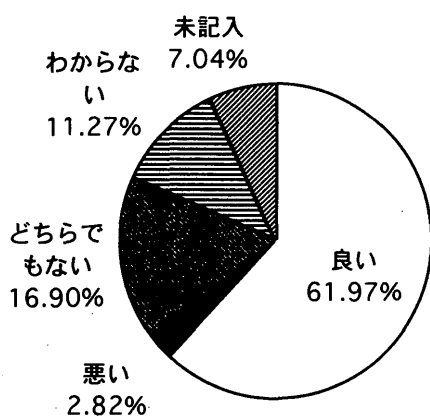


図-6 看護師のはじめの印象

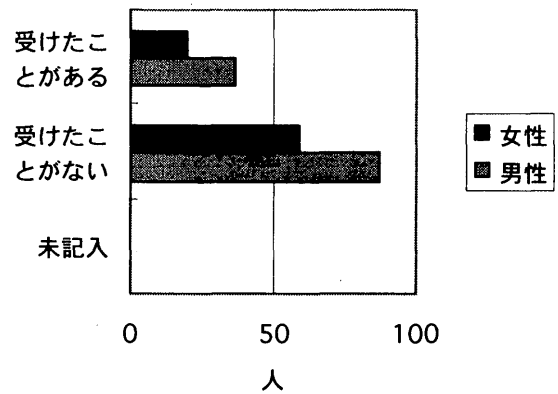


図-7 看護師にケアを受けたことがあるか

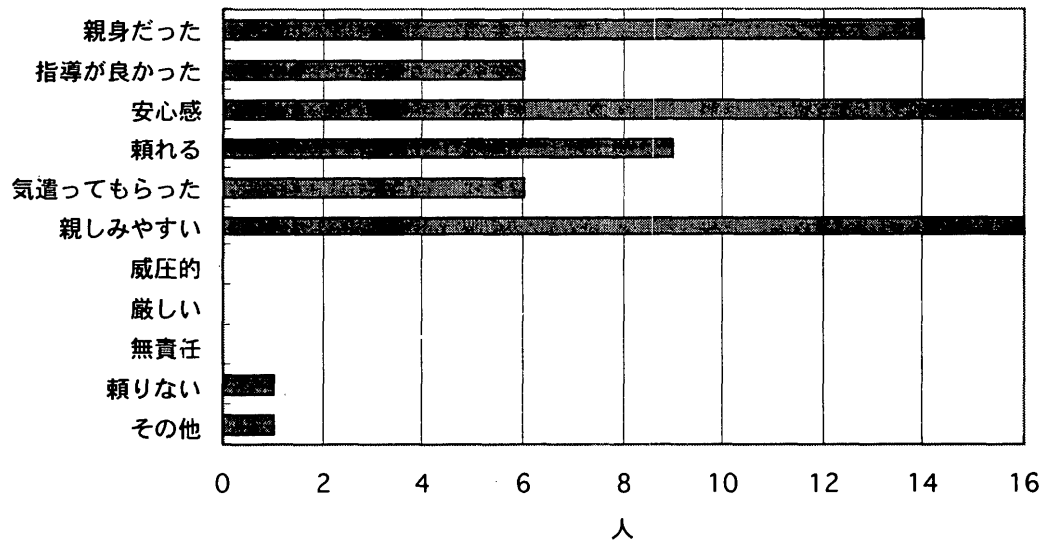


図-8 はじめの印象の変わった根拠

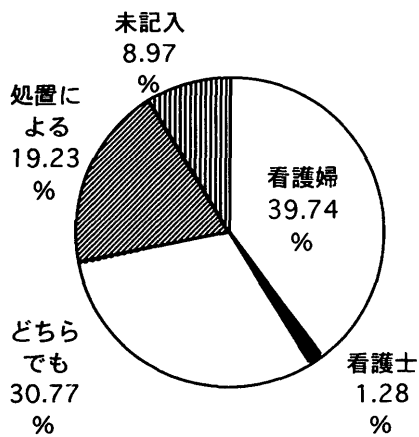


図-9 どちらにケアをされたいか (男性)

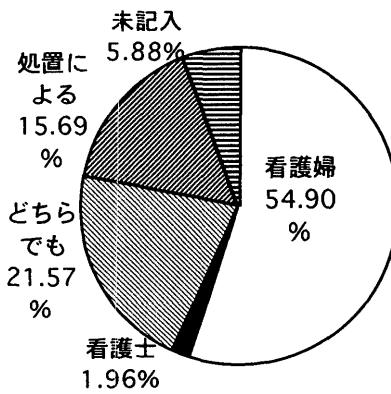


図-10 どちらにケアをされたいか (女性)

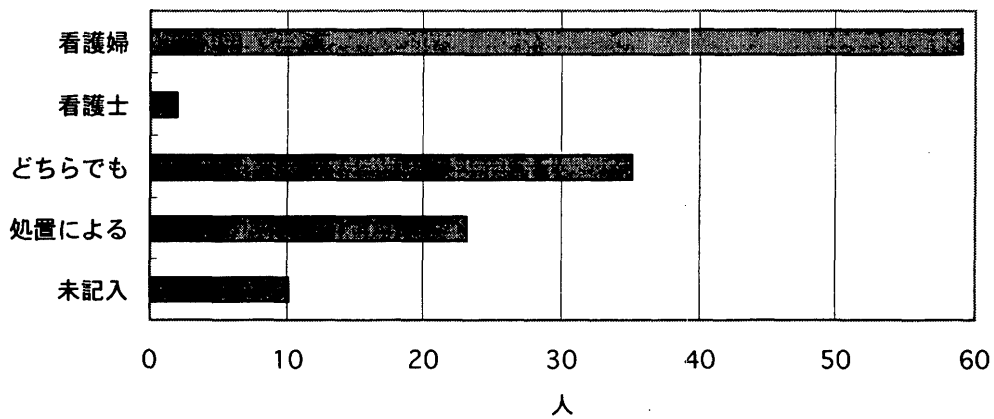


図-11 どちらにケアをされたいか (全体)